

Title	Clinical and Behavioral Impact of Implementing Community-Based Diabetes Disease Management in Japan
Sub Title	日本での地域糖尿病管理の導入による臨床ならびに患者行動に及ぼす影響
Author	坂巻, 弘之
Publisher	慶應医学会
Publication year	2006
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.83, No.2 (2006. 6) ,p.25-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	号外
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20060602-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Clinical and Behavioral Impact of Implementing Community-Based Diabetes Disease Management in Japan

(日本での地域糖尿病管理の導入による臨床ならびに患者行動に及ぼす影響)

坂 巻 弘 之

内容の要旨

目的：欧米で注目されている疾病管理の概念をもとに、島根県安来市における糖尿病管理プログラムの効果を臨床的指標ならびに患者行動、QOLの面から検討し、それらに影響を与える要因を検討することを目的とした。同プログラムは、地域での診療標準と共通教育ツールの作成、登録された患者について「糖尿病手帳」を用いた医療機関連携における患者情報の共有とモニタリングを中心としている。

方法：登録された2型糖尿病患者のうち、ベースライン（2002年1月～2月実施）と介入後（2003年1月～2月実施）の両アンケート調査に回答の得られた316例を対象とした。調査に先立ち、安来市立病院倫理委員会での審査を受けた。患者の日常生活管理をサポートするためのツールとして「ライフスタイルノート」（以下「ノート」という）とよぶ日記を作成し、患者の日常生活上のリスクに応じた到達目標の設定、達成状況の定期的チェックを中心とした介入を行った。介入効果は、臨床的指標（体重、BMI、血圧、HbA1c、血清脂質）を糖尿病手帳から、患者行動（食事・運動指導への順守、糖尿病に関する知識、食生活状況の自己評価）およびQOL尺度としてPAID（Problem Areas in Diabetes；疾病特異的尺度）ならびにEQ-5D（包括尺度）を、それぞれアンケート調査によってデータ収集し、分析した。

結果：対象患者の男女比は男50.6%、登録時年齢 59.6 ± 8.1 歳、経口剤治療32.0%、インスリン治療14.9%であった。介入前後の各指標をみると、拡張期血圧（ $P < 0.001$ ）、HbA1c（ $P < 0.001$ ）、中性脂肪（ $P = 0.038$ ）、食生活スコア（ $P < 0.001$ ）、糖尿病に対する知識（ $P = 0.012$ ）において有意な改善が認められた。QOLについては、PAIDは有意に改善（ $P < 0.001$ ）したが、EQ-5Dは有意に悪化した（ $P = 0.026$ ）。介入後の臨床的指標、患者行動との関係を見ると、指導への順守状況のよいものではHbA1c（ $P = 0.022$ ）、食生活スコア（ $P < 0.001$ ）、知識スコア（ $P < 0.001$ ）のいずれも有意に良好な値であった。またノート使用有無でみると、介入後の食生活スコアでノート使用群が非使用群に比べ有意に優れていた（ $P = 0.002$ ）。

考察と結論：ライフスタイルノートによる生活習慣指導を中心とした介入によって検査値と食生活、知識について有意な改善が認められた。しかしながら、QOLについてはPAIDについては改善がみられたのに対し、EQ-5Dについては悪化しており、QOLについての解釈の難しさが明らかになった。本地域での糖尿病管理プログラムは、医師主導型で医療機関を中核とした地域での疾病管理モデルとして簡便で現実的な方法と考えられるが、今後、医療費等への影響も含めたより長期にわたる検討が必要である。

論文審査の要旨

島根県安来市における地域での糖尿病に対する疾病管理の効果を臨床的指標ならびに患者行動、QOLの面から検討し、それらに影響を与える要因を検討することを目的とした。対象患者は、登録された2型糖尿病患者のうち、介入前後2回のアンケート調査に回答の得られた316例である。患者の日常生活管理をサポートするために、生活上の改善目標を設定し管理を行うためのツールとして「ライフスタイルノート」（以下「ノート」という）を用いた介入を行った。効果の評価尺度は、臨床的指標（BMI、臨床検査値）、患者行動・糖尿病に対する知識、およびQOLを用いた。その結果、HbA1c、拡張期血圧等の検査値と食生活スコア、知識スコアにおいて有意な改善が認められた。しかしながら、QOLについては、糖尿病疾病特異的尺度であるPAIDは改善がみられたのに対し、包括尺度であるEQ-5Dは悪化しており、QOL尺度の解釈の難しさが明らかになった。さらに、ノート使用有無でみると、介入後の食生活スコアでノート使用群が非使用群に比べ有意に優れており、食生活習慣改善に対して本介入方法が有効であることが示唆された。

審査では、第1に、2回のアンケートに回答した集団の代表性について質問があった。これに対し、性・年齢、検査値等はデータが得られるものの、患者の行動、知識、QOLはアンケートでしか把握できないため、代表性の検証を十分できないで行わなかったと説明された。第2に、ノート配布方法について質問され、ノート配布は当該地域の糖尿病患者ほぼ全員に配布されていることが説明された。第3に、介入を標準化するための方法とその検証をどのように行ったかについて質問があった。これに対して、医師・看護師に対してノート使用における患者の目標設定や指導方法に関して事前説明会を実施しているものの、匿名化されているために、医療機関毎の指導内容について確認を行うことができなかったと説明された。第4に、QOLについて、PAIDの改善とEQ-5Dの悪化という、相反する結果が得られたことの解釈について質問された。これに対して、PAIDは心理的負担面を計測しているのに対し、生活指導により心理的負担の改善がもたらされたと推測されるのに対し、EQ-5Dでは5質問中1項目でも悪化するとスコアが大きく減少することの影響の可能性があると回答された。最後に、本手法の有効性を客観的に示すためには他地域で再現性を検証すべきであったとの指摘があったが、患者データを継続して収集できる地域が他になく、新たなデータ収集の協力体制を得ることが困難であったため、1地域に止まざるをえなかったと説明された。

以上のように、本研究にはさらに検討されるべき課題を残しているものの、わが国初の地域での疾病管理の効果を検証した研究として評価された。

論文審査担当者 主査 医療政策・管理学 池上 直己
衛生学公衆衛生学 大前 和幸 衛生学公衆衛生学 武林 亨
精神神経科学 鹿島 晴雄
学術確認担当者：池田 康夫、大前 和幸
審査委員長：大前 和幸

試問日：平成18年3月3日